ボンソワール パリ

片柳 幹著

ORION ☆☆☆ きらめく星・心に灯をともす書 BOOKS ☆☆☆

読者の皆さまへ

この本をお読みになって、どのように感じられましたか、それをぜひおきかせ頂きたいと存じます。わが社がどのような本を企画すべきか、どうしたら、愛読者の皆さまに出版奉仕ができるか、その貴重な参考といたしたいと存じます。

オリオン・ブックスが、夜空に美しくきらめく星であり、人の心に灯をともす良書たらんことを念願するわが社のモットーを完全に生かすためにも、愛読者のご忠告やご意見は金言であると存じます。

ぜひお教え下さい。

オリオン社

こんばんは
ボンソワール パリ

昭和40年2月15日 印刷
昭和40年2月20日 発行
定価 320円

著者承認検印省略

著者 片柳 幹
発行者 小山海次
印刷者 東光印刷株式会社

発行所
東京都中央区銀座東2—11
株式会社 オリオン社
電話 代表 (541) 3821・振替 東京79291

落丁・乱丁は本社でお取替えいたします
(製本 栗原製本所)

ボンソワール パリ

（こんばんは）

ひとりぼっちの屋根裏日記

片柳 幹（みき）著

オリオン社版

パリでの著者

写真撮影　NET常務取締役　武　藤　直　嘉

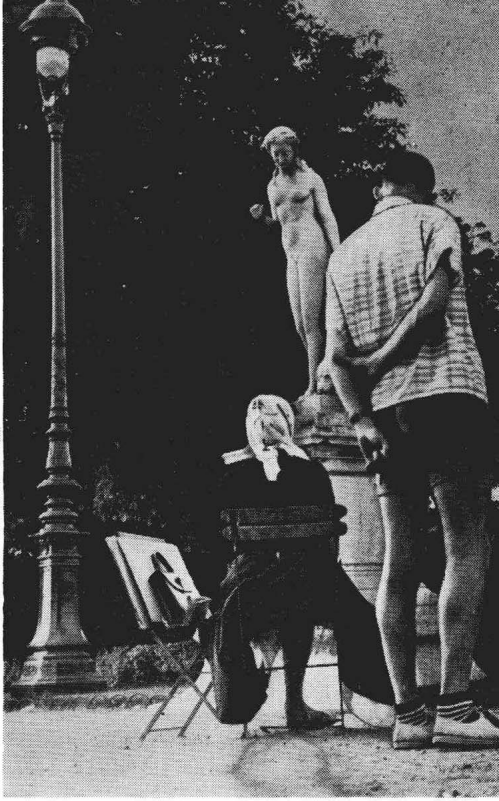
パリのパンは世界一うまい　そのパンのお使いは
子供たちだ　自分の背より高いのがパンである

エッフエル塔から見るパリ市街は　どこの近代都市にも
感じられぬ魅力で迫ってくる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このように堂々とセーヌ河畔に若い二人が無人の境地でキッスをし　恋を語っている風景もパリならばこそ

市場はパリの風景の一つだ　朝の買物もマーケットを利用する



美術の街パリ　公園の一隅や河畔では
よくこうした風景が見られる

オペラ・ハウスの裏通で街頭の燈火の手入れをする
人々も楽しそうである

セーヌ河畔にはこのような街頭書店がある　数々の古本は見る人にとって楽しみのひとつ

公園はみんなのもの　庭は公共でという感じがあふれている
主婦たちはこうして外気を楽しみ　あみ物などはここでする

シュールの絵のように　落書きもなにか美術品に見えるではありませんか

さすがに美術の街パリ
美術学校の生徒たちは道路に絵を書いて勉強？

新聞や雑誌を売る街頭店　日本の街頭店とちょっと違うムードである

新聞は立って読むもののように　パリジャンは外で新聞を読む

パリに来た外人観光客　迷子にならぬように革紐がついている

アイスクリームの移動店にもそれぞれの工夫と個性がある　エッフエル塔近くの風物詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

フロンティナン地方の　昔と変らぬぶどうつみ風景

フランス西部
ボーズピカルディ　シャンパーニュ地方の大農場

序

渡辺紳一郎

ボンソワールパリによせて

渡辺紳一郎

片柳幹のパリ通信は、私の友人である彼の親父さん片柳忠男が出している週刊紙で、毎回待ちかねて読んだ。

彼がパリへ着いてから間もなく、この通信を始め、それを三年以上続けた。彼が早稲田の文学部へはいったころ私がフランス語の手ほどきをした関係もあり、私自らも三十何年か前には彼と同じような留学生としてパリにいたから、特別に親しみを感じ、まるで彼が私に当てた私信でもあるかのように繰り返して読み、変わったようで、また少しも変わらないパリをなつかしく思った。

彼の通信は正直である。単玉写真機みたいに、映ったものが、そのままであって、修正も、作為も、なにもない。解らないことは、解らないという、知らざるを知らずと為す、これ知るなりで、本当のことが書いてある。また聞きの、いわゆる伝聞証拠というのはない、皆なまの通信ばかりである。パリに四、五日いてパリの文化批評、フランス文明論を書くという勇ましくも、たくましい心臓を彼は持たない。不完全帰納ということは、彼がもっとも嫌うところらしい。

彼は日本の学校でフランス語とフランス文学を習い、卒業と同時にあこがれのパリへ留学する機会に恵まれた。彼の通信を読んで、彼は素直な好青年であるこ

とを知った。謙虚に絶えず自己反省しながら、正直に見たまま、感じたままを述べている。親父さんから、せがれの通信を出す、校正してくれと頼まれ、ゲラ刷を渡された。今までの短い通信文を、切れ切れに読んだ時とは、また別の感じを持って一気に読んでしまった。

日本で、あこがれ、自分なりに形作っていた想像のパリ、理想のフランス、文学だけを通して知っていたフランスとフランス人を描いていた彼は、さてパリに着いてみると、自分の想像どおりの物事にあって大いに我が意を得たり、喜んだり、その反対に、想像を裏切る物事に出会って、がっかりしたり、憤慨したりする、というのが最初のころの通信に見えている。

そうしてるうちに、段々落着いて来て、不当に感心したり、憤ったりしなくなるという過程が、文中に現われて来る。それから次第に精神的視野が広くなってすべてを寛大な気持で眺めるようになる。パリのエトランゼとして、日本への郷愁から、すべてのことが、日本との比較になってくる。判断は比較から起こる。

モードやシャンソンで、フランス人を親類みたいに思ってる日本人が少なくないが、どうして、どうして、フランス人と日本人とは、まるで異った遊星に在る

かのごときところもあるのが、彼に判ってくる。

彼の通信は、いわば、あるひとりのパリ留学生の「心の日記」である。全部を通して読んで、私が感じたことは、スーヴェストルの「屋根裏の哲人」に似ていることである。

にぎやかな片柳忠男の長男が、こうした心静かな青年哲人であるのは、いったい、どうしたことであろう。

「個人主義を基礎とした自由」、いいかえると「自由のための個人主義」、これがパリであり、これがフランスであるということを見抜いた彼の悟りに似たものは、私も全く同感である。

この「個人主義」は日本には先祖以来これなきものである。これを、つかんだだけでも、パリへ留学した値打ちがあるというものである。彼の通信はフランスのことを紹介するに当たって、多く祖国日本をふり返っている。

大げさにいうと、唐の都、長安に留学した奈良朝の青年みたいなところもあって、またパリへ行ったことのない人にも面白く読める。

目　次

序　渡辺紳一郎

道ばたのキッス・20
パリの空地・22
パリの日本人記者達・24
母と子・26
稼ぐサラリーマン・28
パリで能公演コクトーも絶讃・30
センチメンタル・32
生活を楽しむパリッ子達・34
パリのお医者さん・36
恋心をかきたてる・38
窓から見た花のパリ・40
イタリーの老母・42
まだ戦後は続いている・43
永遠の都ローマ・44
ラ・ボエーム・46
これが平和か・48
〝日本人の誇り〟・50
52・俗　語
54・夜とひるの女達
56・売春婦
58・うまい皮肉
60・留学生とチップの話
63・パンへの愛情
64・フランス名の柿
66・海苔と同胞の温情
68・普段着のパリ
70・パリは生きている
72・自由を我等に
74・ボアのアカシア
76・学生と自家用車
78・乗客タッタ二人
80・民族の色彩
82・若い個性美
84・コトバこそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com